

バレエ・リュス 踊る喜び、生きる喜び

2007(平成19)年12月5日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★★



監督・脚本・製作・編集＝ダニエル・ゲラー／ダイナ・ゴールドファイン／ナレーター＝マリアン・セルデス／出演＝レイヴン・ウィルキンソン／ナタリア・クラソフスカ／アレクサンドラ・ダニロワ／イヴォンヌ・クレイグ／ロシェル・ザイド／イヴォンヌ・シュートウ／タチヤナ・ステパノワ／ミア・スラヴェンスカ／ジョージ・ゾリッチ／タマラ・チネロバ・フィンチ／ニニ・テイラード／ミゲール・テレホフ／マリア・トールチーフ／ニーナ・ノヴァク／イリナ・バロノワ／アラン・ハワード／ウェイクフィールド・プール／マーク・プラット／ターニャ・リャブシンスカ／フレデリック・フランクリン，“CBE” / “デйм” アリシア・マルコワ／タマラ・トウマノワ／レオニード・マシーン／ジョージ・バランシン／ワシーリィ・ド・バジル大佐（ファントム・フィルム配給／2005年アメリカ映画／118分）

第1章

ハリウッド映画もいよいよ変容か？

……激動の20世紀前半を50年以上にわたって生き抜いた伝説のバレエ団「バレエ・リュス」の姿が、2000年6月の「同窓会」によって見事に甦った！70代、80代、90代となつてなお、バレエの普及に意欲を燃やす団員たちの珠玉の言葉は感動的！ また、リーダーたちの人間ドラマも興味深い。ワンチャンスをものにした、こんなドキュメンタリー映画に大拍手。こりゃ必見！

あなたはバレエ・リュスを知ってる……？

私は1949年生まれの団塊世代。そしてバレエ音楽を含むクラシック音楽についてはかなり知ってるつもり。ところがその私ですら、バレエ・リュスと聞いても、それは〇〇と答えることはできず、「それは一体ナニ？」と聞き返すだけ……。そりゃ当然。なぜなら、「バレエ・リュス」は「伝説のバレエ団」という形容詞がついているのだから……。

プレスシートによれば、「1909年、一夜のバレエ公演がパリを熱狂の渦に巻き込んだ。それこそが、天才興行師セルジュ・ディアギレフのバレエ団、バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）である」とのこと。このバレエ団のメンバーは、1920年代後半にロシア革命によってロシアからパリに逃れていったダンサーたちによって構成されたもので、その中には伝説のダンサー、ニジンスキーらが含まれていたとのこと。

しかし、ディアギレフが1929年に死亡したことによってバレエ・リュスは解散したため、バレエ・リュスは死んだと言われたらしい。ところが、ディアギレフの死亡後もダンサーたちは踊り続け、「31年、ロシア人のド・バジル大佐と、フランス人でモンテカルロ劇場の監督だったルネ・ブリュムがバレエ・リュスの再建を宣言。ディアギレフのダンサーや振付師と契約し、舞台装置や衣装も継承した」とのこと。

そんな20世紀初頭の伝説のバレエ団を私は知らなかった。このバレエ・リュスについての歴史的な経過はプレスシートやネット情報によっていくらかも知ることができるから、そんなバレエ団のドキュメンタリーであるこの映画を是非一緒に勉強してもらいたいものだ。

約40年ぶりの同窓会は圧巻！

このところ団塊世代の私の同級生たちは2008年4月から順次還暦を迎えるため、還暦記念同窓会の話題がもち上がっているが、ロシア革命と2つの世界大戦を生き抜いたバレエ・リュスの団員たちが約40年ぶりに、ニューオリンズの同窓会に集まったのは2000年6月。この映画は、そこに集まった数多くのバレエ・リュスを代表するダンサーたちの語りからスタートするが、その歴史の重みと彼ら（彼女ら）の生き方は実に壮絶！ 連日のアメリカ公演では、眠るのはもっぱら列車の中という強行軍、そしてまたもらえるギャラは生きていくのに必要なだけという厳しいもの。しかしそんな中、彼ら（彼女ら）はただバレエを踊りたいということに生き甲斐を見出し、その一点のみに集中して2000年まで生きてきたわけだ。

この映画はドキュメンタリー映画だから、バレエ・リュスに生き、今や70代、80代、

90代になったおじいさん、おばあさんに登場してもらっているわけだが、団塊世代の私でも、そんな生きざまを観ているとつい感動の涙が出てくるのを抑えることができない。

世界各国に散らばって今なおバレエの普及活動に熱意を燃やし続けているこんなおじいさん、おばあさんが一堂に集まるチャンスはきっとこれ1度限り。したがって、



そんな同窓会は圧巻！ そして、それをこんな貴重なドキュメンタリー映画にまとめることができたのもこのワンチャンスだけ。そんな映画を観ることができたのはホントに最高！



『バレエ・リュス 踊る喜び、生きる喜び』DVD、6/25 (水)～発売中。¥4,935 (税込)

よくもまあ、こんな映像が残っていたもの

この映画のチラシには、あの伝説のダンサー、ニジンスキーの姿をはじめ、数々のバレリーナの美しい姿が写っている。しかし、こんな写真が一体どれくらい残っているの……？ 私はそんなギモンをもちながら試写室に臨んだのだが、この映画ではそんな貴重な映像がいっぱい！ よくもまあ、こんな貴重な映像がたくさん残っているものだと感心するとともに、とにかく感動でいっぱい。

チラシによると、「本作に使用されたアーカイヴ・フィルムには、今は見ることのできない幻の演目も登場する」とのことだから、ホントにこの映画でそんな貴重なフィルムを観ることは価値がある。何をさておいても、この映画だけは観なければ……。

人間ドラマもしっかりと その1——リーダーたち

この映画が面白いのは、1909年から1962年までの半世紀以上にわたるバレエ・リュスの活動を時系列に沿って紹介するのではなく、そこにあったはずの人間ドラマを浮かびあがらせたこと。人間ドラマその1は、バレエ・リュスのリーダーたちの肖像。

何といっても面白いのは、1931年にバレエ・リュスの再建を宣言したド・バジル大佐とその芸術監督となったレオニード・マシーンとの確執。バジル大佐率いるバレエ・リュスとマシーン率いるバレエ・リュスが互いにしのぎを削り合いながら、アメリカ、オーストラリア、中南米等にバレエを広めていく姿は圧巻！ さらに、マシーン時代の後を引き継いだデナムやジョージ・バランシンのリーダーぶりも興味深い。この映画はそんなリーダーたちの人間ドラマを、実にイキイキと描いているから、その点に注目！

人間ドラマもしっかりと その2——ダンサーたち

この映画は、2000年6月の同窓会に集まった数々の名ダンサーたち男女20名のインタビューでの言葉を借りながら、その時代にスポットライトをあてていく。そのため、私たちはホントにその時代にタイムスリップしたような感覚で、その美しい姿を楽しむことができる。

当初はフランスに亡命したロシア人がメインだったが、バレエ・リュスが国際的に有名になるにつれてアメリカ人やネイティブアメリカン、さらにアフリカ系というユニークなダンサーたちも次々と入団。またソリストとして一世を風靡したダンサーだけではなく、群舞に加わったダンサーたちも登場するから、団員たちの人間関係や過酷なツアーの様子もホントにイキイキと私たちに伝わってくる。登場人物たちの名前をたくさん表示したので、是非この1人1人の生き方と活躍ぶりを味わってもらいたいものだ。

これぞ芸術！ これぞ文化！

バレエといえば「白鳥の湖」と「くるみ割り人形」しか思い出せないかもしれないが、全然そうではない。芸術の都パリで1909年に始まったバレエ・リュスには多くのダンサーが入団し成長していっただけではなく、20世紀を代表する音楽家や芸術家たちが惜しみない協力をしていたことがよくわかる。私の知っているだけでも、音楽家ではストラヴィンスキー、ラヴェル、ドビュッシー、プロコフィエフなど、そして芸術家ではピカソ、マティス、ミロ、ダリ、シャガール、ココ・シャネル等々そりゃすごいもの。

ナチスヒットラーによるポーランド侵攻は1939年9月だが、そんな激動の時代でもこんな音楽家や芸術家たちがバレエ・リュスのバレエを支え続けてきたのだから、さすがにヨーロッパの文化度、芸術度はすごい。これぞ芸術！ これぞ文化！ という薫りをこの映画によってタップリと吸いこみたいものだ。

2007(平成19)年12月7日記